

## 新型コロナウイルス騒動その二

小島秀樹

三月一三日日本経済新聞夕刊は、ニューヨーク株式市場でのダウ工業株平均が史上最大の二三五二ドルの下げ幅となったと報じた。世界の株式時価総額は一日で六兆ドル（六百兆円）減った。日本の一年のGDPを超える額である。ジョンズ・ホプキンス大学の発表によると、三月一三日現在世界全体では感染者一四五、一三三、死者五、四〇二、致死率三・七二％である。回復した人の数七〇、二三人で回復率は四八％超である。クライアントとの面会は、電話会議に切り替えて行われているので、仕事はキャンセルされていない。ほとんどの会合がキャンセルされる現状が四月以降続くとホテル、劇場、レストラン、その他娯楽場関係への経済的打撃は深刻な事態になると予想される。顕微鏡の発明は一六八三年、細菌の感染症の研究が緒に着く。一九世紀、フランスのルイ・パスツール（L・P）は現在の医学の考え方の基本を作った。患者の体外から侵入する細菌が感染症としての病を発生させると考えた。当然治療は、菌を殺すことである。それが抗生剤であったり抗ウイルス剤という方法である。パスツールの細菌理論はその後の一五〇年間を支配し今日に至っている。同時代を生きた研究者アント

ワース・ベシヤン (A・B) は、体内のよい細菌と悪い細菌のバランスが崩れることが病気の原因である、バランスがとれていれば病原菌は繁殖できないはずだと主張した。患者の体内環境が良好なら、外から菌が入ってきても発病しないと考えた訳である。腸内在菌のことがほとんど分かっていない時代であるが、ベシヤンの考えは注目に値する。何やら前号で紹介したミュンヘンのマックス・ペッテンコーフェル (M・P) の、患者の抵抗力が弱ければ発病するが、強ければ発病しないという考え方に似ている。現代の言葉では免疫力の強弱である。A・BもM・Pも患者側の身体の状態が元気であれば発病はしない、と言っていることになる。現役臨床医小澤博樹氏は著作で、体内環境が清浄であれば、病原体が入り込める余地はない、と言い、A・BやM・Pの説が正しいと主張している。パストゥールやコッホの説で製薬会社が作った抗生剤・抗ウイルス剤の顛末が、MRSA (黄色ブドウ球菌) などの殺すことのできない耐性菌の出現である。更に強い薬で殺菌しようとするとも体内に生息している常在菌も同時に死滅させてしまう。体内環境は荒廃し免疫力を低下させる。その結果、感染症をおこしやすい体内環境を作り上げていくのである、と言う。メディア情報は感染 (陽性) と発病の区別を

していない。A・B説では感染しているか否かより、病気の発症か否かが重要である。発症がなければ陽性の検査結果を恐れる必要はないのである。感染症専門の山本太郎教授は、一六世紀、二〇〇人弱のスペイン人が南米インカ文明を滅ぼした。スペイン人の持ち込んだヨーロッパの感染症への免疫をインカ人は全く持っていなかったからである、と紹介する。この事実が正しいとすると、A・Bや小澤医師の説では説明できないことになる。歴史上のことであり、インカ文明消滅の真の原因の確証がない現段階では、人間の持つ免疫力にあくまで重心を置き、公衆衛生学が希求する菌の発生や接触を減ずる創意工夫の防衛・備えも首肯したい。